

Title	尾藤正英著 日本封建思想史研究
Sub Title	
Author	島崎, 隆夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1962
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.55, No.3 (1962. 3) ,p.313(105)- 314(106)
JaLC DOI	10.14991/001.19620301-0105
Abstract	
Notes	社会思想史研究特集 新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0105">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19620301-0105</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

場合にのみ可能である」と。マルクスにあつては、その未来を自分でかたちづくるところの予言者は、理論において自己意識にたつたプロレタリアートである。(S. 167)

(三)

以上によって、最近の傾向的な「西欧的」マルクス解釈が、どのようなものであるか、かなり明確にうかがえると思う。いま、ここで本書の基本的立場を全体的に検討することはできないが、最後に若干のコメントをつけ加えておこう。

本書は、初期マルクスの生成史的研究からみた場合、資料的には、ほとんど従来の研究を凌駕する点はないと思う。初期マルクスの生成史的研究の観点から問題となる点は、(一)、『国法論批判』におけるフオイエルバッハの影響を過小評価する点、(これは逆にいえばヘーゲルの過大評価に関係する)、(二)、『ヘーゲル法哲学批判と平行

してマルクスがはじめていた、歴史研究をまったく評価していないこと。(三)とくに『独仏年誌』におけるフランス社会主義の結びつきを評価していないこと。(四)、『経済学批判』が、『手稿』段階に直接ひきもどされて解釈され、本来の経済学批判のもつ意義が把握されていないこと。(五)、『手稿』から『ドイツ・イデオロギー』への発展が具体的に明らかにされていないこと。などの諸点をあげることができると思う。これらの問題点は、根本的には、著者がヘーゲルマルクス関係のみを基本的な軸として考察し、マルクスの全体にわたってその「形而上学的」思弁哲学をみる立場に関連している。従来の研究が『手稿』に集中されているだけに、本書が『手稿』から『ドイツ・イデオロギー』へと研究をすすめている点は、これを評価したいが、著者が、以上のような立場を強調するために、とりわけ第四章の分析は十分内在的になされておらず、問題がのこされっていると考えられる。

新刊紹介

尾藤正英著

『日本封建思想史研究』

学界には時として無批判のままに不正確な知識や先入観が科学的なよそおいの下に通説となり、定説として市民権を獲得している場合が多い。これを批判し、それに対して新しい主張を展開することは、少くともその主張を裏付けるにたる十分な検討と、激しい情熱とを必要とするであろう。日本思想史とくに幕藩体制下の封建思想の研究においても、今日まで幾つかの定説が存在していた。わが国封建思想の思想構造とその性格規定、さらにその思想的根源を探ることは最も重要な課題の一つであつて、これはまずわが国封建思想と「朱子学」とを関連づけて把握することを中心として論ぜられて来た。とくに、封建的政治思想の解明において果された丸山眞男氏の主張は極めてユニークであり、すでに学界の一つの共有財産として、いわば定説となりつつあつた。しかし今日では丸山氏の研

新刊紹介

究成果を各自の研究の出発点にすえながら、これを批判克服せんとする努力が思想史研究の分野で起りつつあり、すでにその研究を発表しつつある研究者が現れている。本書の著者尾藤正英氏もかかる研究者群の一人であつて、すぐれた問題視角と鋭敏なる思索と綿密なる検討の下に集められた本書はとくに注目

に値する。著者は過去の研究においてわが国封建思想を安易に「朱子学」と結びつけ、直結的把握に終っていることについての疑問を提起し、朱子学が社会的歴史的事象の異なる日本社会においてたどつて行つた運命を探り、それとの関連において日本における封建的思想のあり方、さらに封建制そのもののあり方を解明することを目標とした。(はしがき)著者はわが国封建思想を認識するために、江戸時代前期の数人の学者——閻斎と藤樹、さらに直方と蕃山——を対象として取上げ、過去の通説への批判を試みた。まず序において「近世儒学研究の課題」を論じ、本論第一部において、著者は「体制に対する擁護者的立場」として閻斎の思想を対象とし、閻斎学と朱子学との異質性を強調し、閻斎学のもつ社会的意義を検討し、それを成立させた「社会

的需要」を明白にせんとした。崎門学派は崎門三傑(直方、網斎、尚斎)を通じ展開したが、閻斎により破門をうけた直方の思想とくに注目し、そこに崎門学派の主流と目される思想構造を論じている。閻斎—直方の思想を検討することによって、全体としての崎門学派が如何に幕藩体制擁護的作用をなしたかを明白にし、思想構造として「朱子学」との相異性をとくに力点をおいて主張した。

第二部において著者は「体制に対する批判者の立場」に立つ学者として藤樹—その弟子の蕃山の思想を対象として論じている。藤樹の朱子学的思想の変質、思想形成の過程を、陽明学との関連において検討し、藤樹学と陽明学との類似と相違とを明白にせんとした。藤樹学に見られた体制批判者の見解の本質を探り、藤樹をしてかかる思想を懐かせるに至つた社会史的背景の検討に及ぶ。藤樹学は淵岡山と熊沢蕃山とにより二分されて行くが、著者は主として蕃山を対象とし、旧来の蕃山理解に批判を加えつつ、蕃山の歴史的評価を試みている。

紙面の関係で個々の内容を詳細に紹介検討することは出来ないが、氏のすぐれた洞察と非常なる努力とは日本封建思想史研究に対し

新しい一つの道標を樹立したという意味で、その成果は極めて高く評価されよう。大方の一説をすすめる所以である。(青木書店・A5・三〇七頁・九五〇円) 島崎 隆夫

武田清子編

『思想史の方法と対象』

——日本と西欧——

本書は国際基督教大学のアジア文化研究委員会が、日本・中国・インド等アジアにおける伝統的諸思想とキリスト教との相互影響の問題を人間観や歴史観に焦点を置いて追求する為の基礎的作業の一つとして、約二カ年に亘って開設した思想史の方法論に関する連続講義に、加筆したものである。丸山真男「思想史の考え方について——類型・範囲・対象——」、高坂正顕「思想史の方法概念としての世代の概念とその取り扱いについて」、鶴見俊輔「転向研究の方法」、大塚久雄「東西文化の交流における宗教学の意義——マックス・ウェーバーの『儒教とピューリタニズム』を中心に——」、中村元「日本の思想の世界史的理解」、家永三郎「日本思想に

おける外来思想の受容の問題」、竹内好「方法としてのアジア」、西谷啓治「日本における伝統的宗教意識」、武田清子「キリスト教受容の方法とその課題——新渡戸稲造の思想をめぐって——」の九篇を収めている。執筆者は見られる様にさまざまな傾向を示して居る。

丸山真男氏の巻頭論文は、思想史の諸類型をあげた後、思想の意味乃至価値を測定する基準として、解答の徹底性・浸透範囲または流通範囲・思想の幅乃至包括性・(論理的)密度及び思想の多産性をあげ、次いで思想史を音楽の演奏になぞらえ、思想史はいわば追創造ナツハシエツプフェンであって、「事実」だけへばりつくという事にだけ関心のある人、あるいは対象に触発されて自己のイメージネーションを高揚させることにまったく不感症な人、「資料」の主體的なコンストラクションの出来ない人は思想史に向かない、他方では「これと全く反対に資料による客観的制約、歴史的な対象それ自身によって枠をはめられることの厳しさに耐えられないところの『ロマンティスト』や『独創』思想家もまた思想史家に向かない」と明言している。最後に、「現在を基準にして過去を裁くか、現在

のイメージを過去にちりばめる」思想史の不毛性を指摘し、過去の思想はどっちの方向にでもいき得る可能性において理解されねばならぬと主張している。以上の意味でこの論文は本書の巻頭を飾るにふさわしい最も重要な意義を有するものである。第二論文で高坂氏は世代的文化荷担者(Ethnicity)の更迭は激しい歴史の動きの中では新旧思想の対立を意味したとされ、おとぎ話や民間伝承などを生み出す無自覚的大衆と、明確に生の自覚をもつぐれた天才とを媒介する、「一応、時代の教養」を担うひとびと、いわば知識人たちをも含んで「世代」(Generation)を構成するひとびとの役割を指摘し、天才やかなりすぐれた人々は「時に適わざるもの」として次の世代により受容され浸透させられる。時代とはこの様な世代の交替を主体とするものだとされる。しかし、一定の「生の意識」「集団の精神」の担い手としての、「社会的」で「しかもある長さの歴史的期間を区切るもの」もある「世代」という概念を思想史の研究上に敢てもち出す必要がどこにあるのか。たとえばウェーバーの特定の歴史的内容をもつ「社会層」に比して、どれだけ有効な分析要素たりうるか疑いなきを得ない。第三論文で鶴見

氏は「転向」の非連続性(出発点への復帰という近代日本思想史の根深い病患を論じておられるが、「近代日本思想史講座」(筑摩書房刊)のすばらしい諸成果や丸山真男「日本の思想」また思想の科学研究会の共同研究「転向」(上・中)などとともに考察する必要をここで指摘しておきたい。第四論文で大塚氏はウェーバーの「宗教学」第一巻所収の「儒教と道教」中の一章「儒教とピューリタニズム」を、ヨーロッパの学問方法によりアジアを研究するという問題・キリスト教信仰とアジア文化との関連という観点から紹介しつつ、文化諸宗教の神義論(Theology)社会思想・社会批判・経済倫理・人間観の面から東洋と西洋の文化や社会の基本的構造の比較研究を進める手懸りを提供して居られる。禁慾的プロテスタンティズムの社会思想・社会批判とマルクス主義との関係、宗教を通じて社会現象を見てゆくという方法など重要な方法上の問題がとりあげられているが、残念ながらここでは紙幅の都合で割愛せざるをえない。中村氏の第五論文は、思想史上の類型現象をやや過度に対比して居られるが、類似現象は元来夫々異った歴史の枠をもち、質を異にするものであるから、我々の興味は氏の指摘され

る東洋と西洋の差異が、何故生じたかという点に注がれるべきである。家永氏の論文は日本に外来思想が輸入された時に必ず見られた「変容」の問題をとりあげ、それを主体的条件の未熟に帰して居られる。仏教の魔呪性・無常観・深い苦悶においてでなく、むしろ美的享楽生活という角度から「ニーチェを捉えた」高山樗牛の「牙を抜かれたニーチェ」理解、抵抗権とか革命権の面を脱落させた民主主義、キリスト教の国家主義化などはその例証だとされているが、他方土着的なものとの断絶関係に立つものもない訳ではないとされている。竹内氏の論文も同様の問題を提起されている。外庄による近代化を如何にして内発的なものに出来るかと問い、現代のアジア人が考えている事は、「西欧的な優れた文化価値を、より大規模に実現するために西洋をもう一度東洋によって包みかえず、逆に西洋自身をこちらから変革する、文化的な巻き返し、あるいは価値の上の巻き返しで、東洋の力が西洋に西洋を変革する、これが今の東対西という問題点になっている。これは政治上の問題であると同時に文化上の問題である。……その巻き返す時に、自分の中に独自のものがなけ

ればならない。それは何かというと、おそらくそういうものは実体としてあるとは思われない。しかし方法としてはありうるのではないか。」という悲劇的結論に到達される。嘗て「近代の超克」(『近代日本思想史講座』第七巻、筑摩書房)を書かれた氏に私はここで超克すべき「近代」(『西洋の生み出した普遍的な価値』とは何かと問いたい。「自己の中に独自のもの」、そういうものの「実体」を家永三郎著「近代精神とその限界」(角川新書)は示唆していると考える事は誤謬であろうか。西谷氏の論文は日本の伝統的宗教意識は「実在感」であって、魔呪的・自然神的・シンクレティズムの宗教意識という根源にたえず還元することが新しい創造の条件であるとされる。かかる原始的・自然的的精神構造論が前出竹内論文と竹内氏の意図に反して、接合されれば、人はそれが、ひとたびは世界史によって審かれた日本のアンシャン・レジームの論理そのものである事に想い到るのである。武田氏の新渡戸稲造論では、日本におけるキリスト教受容のあり方としては内村鑑三とは異なる型ではあったが、「日本の精神的土壌の深部に価値の変革をおこし、民主主義が草の根から芽を出し、育つてゆくためには、